



2024年度北アルプス南部地域におけるライチョウ調査結果

長野県では2021年からライチョウ保護スクラムプロジェクトを実施しています。このプロジェクトでは環境省が主導する中央アルプスにおけるライチョウ復活事業に協力してきただけでなく、県内の主要なライチョウの生息地における生息状況調査も行っています。2024年には餓鬼岳から燕岳、大天井岳、常念岳を経て、蝶ヶ岳、大滝山まで及び大天井岳から西岳、赤沢山に至る区間を対象に調査が実施されました。この地域は、北アルプスの大パノラマを楽しめる縦走路として、一般に「パノラマ銀座」(燕岳から蝶ヶ岳に続く稜線)や「表銀座」(燕岳から槍ヶ岳に続く稜線)として親しまれており、同時に、ライチョウの主要な生息地としても知られています。後に示すようにこの地域は1980年頃から何度か調査が実施され、主要なエリアでは2000年代以降個体数の減少がみられていたため、その動向が注視されるエリアでした。

ライチョウは基本的に一夫一妻のなわばりを作り、縄張りには糞や羽、砂浴びの跡等様々な生活痕跡が残されます。個体だけでなくこれらの痕跡を確認することでライチョウのなわばりを正確に数え、その個体数を推定することができます。2024年の調査では合計77の縄張りを確認することができました(表1)。これまで燕岳から常念岳周辺を中心に、2000年代初頭から個体数の減少がみられていました。例えば、なわばりが最も集中していた大天井岳周辺では1980年頃には41のなわばりが確認されていましたが、2007年には22、2016年には17と半数以下まで減少していました。しかしながら今回の調査では33まで個体数が増加していました。また、燕岳から蝶ヶ岳ではすべての山域で2016年からなわばり数が増えていることが確認できました。一方で、1980年頃から約半世紀振りに調査が実施された西岳周辺ではなわばり数が10から3まで減っていたことや、餓鬼岳、大滝山では2000年代の調査結果と同様になわばりが確認されませんでした。

1980年頃の調査以降、この地域全域が調査されたのは初めてでした。全域では1980年頃から20%程度の減少となりましたが、2010年代中頃まで確認されていた右肩下がりの個体数の減少から回復していたことが確認できたのは大きな成果です。一方で、一部の地域でなわばりが消失していることや、キツネやテンといった天敵の痕跡やニホンザルの群れが高山帯でも確認されていることから引き続き定期的なモニタリングで生息状況の把握を行い、状況に応じて必要な保護対策の実施が望まれる結果となりました。2024年度の調査でニホンザルの群れが確認されていることから、2025年度にはこの山域で高山域からのニホンザルの追い払いを行いました。2025年度の追い払いの実施状況等踏まえながら今後も保護対策を実施検討していきます。

(小林 篤/自然環境部)

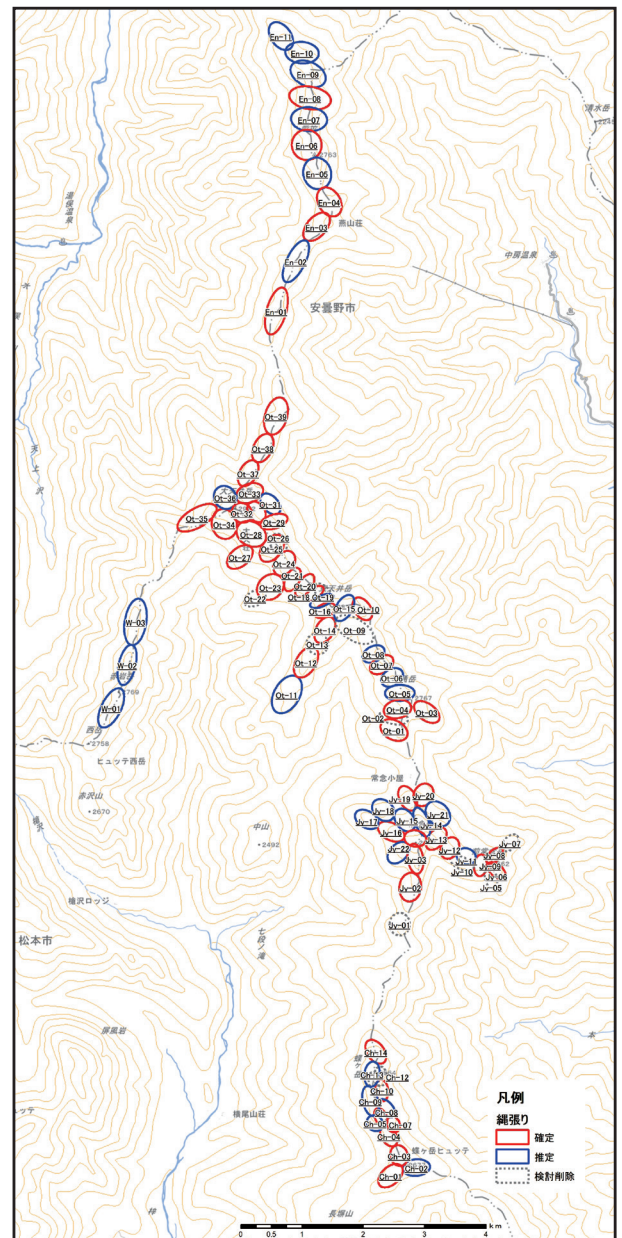


表1 北アルプス南部地域における過去のライチョウのなわばり数の変化

調査年	餓鬼岳	燕岳北部	燕岳周辺	大天井岳周辺	西岳周辺	常念岳周辺	蝶ヶ岳周辺	大滝山周辺	全域合計	文 献
1979～1981	3	2	13	41	10	14	12	2	97	羽田1981ab、羽田ら1984
2005	—	—	—	—	—	4	6	0	—	中部森林管理局2005
2008・2009	1(2008) 0(2009)	—	—	—	—	—	—	—	—	宮野2009
2007	—	—	10	22	—	12	—	—	—	中村未発表表(データは長野県2016より抜粋)
2016	—	—	6	17	—	12	5	0	—	長野県2016
2024	0	3	8	33	3	18	12	0	77	今回の調査結果
1980年代からの増減	-100%	150%	-38%	-20%	-70%	129%	0%	-100%	-21%	

